

“我々”としての感情とは何か？

— 集団間紛争における感情の役割を中心に —

縄田健悟 (九州大学)

“Our” emotions: The role of emotions in intergroup conflict

Kengo Nawata (*Kyushu University*)

(2015年2月23日受稿, 2015年5月14日受理)

Recent studies have demonstrated the importance of emotions in the escalation and reduction of intergroup conflicts. This paper reviews and discusses studies on emotions in intergroup conflict. This paper aims to understand recent findings and indicate future areas of focus regarding how emotions elicit discrimination, prejudice, and war. First, I introduce intergroup emotions theory, one of the most important theories on intergroup relations, and discuss the relation between intergroup emotions and intergroup aggression. Second, I examine collective emotions, which is the social or group phenomenon of sharing intergroup emotions across the entire group. Finally, I review studies on emotion regulation in intergroup conflicts and provide ways for resolving conflicts by intervening in real intergroup conflicts.

Key words: Intergroup conflict, intergroup relations, intergroup emotions, war, prejudice, discrimination

1. 集団間紛争における感情

集団間紛争 (集団間葛藤, intergroup conflict) とは、集団と集団が争った状態を指している。戦争や民族紛争が代表的なものであるが、組織内の部門間対立や不良集団間の諍い、さらには近年問題視されている他国民・他人種へのヘイトスピーチなども一種の集団間紛争である。

近年の心理学における集団間関係研究では、感情の視点から多くの研究が行われている。伝統的な偏見・差別研究では、ステレオタイプなどの否定的な知識や認知、信念に焦点が当てられてきた。いわば、“cool”な社会的認知が検討の中心であった。もちろんステレオタイプ研究が偏見や差別の心理メカニズムの解明に寄与しているのは疑いようがない一方で、これらのアプローチは過度に静的であり、熱狂的で“hot”な側面の検討は不十分であるという問題点が挙げられる (Mackie, Smith, & Ray, 2008)。近年の研究は、外

集団に関する否定的なステレオタイプといった認知的側面よりも、嫌悪や恐怖、怒りといった感情的側面の方が、差別や集団間攻撃を予測・説明することを指摘している (Stangor, Sullivan, & Ford, 1991; Tropp & Pettigrew, 2005)。それに伴い、2000年代以降の集団間関係研究では、感情的側面からのアプローチが増加している。集団間関係が研究される社会的意義は、集団間関係が破壊的な紛争状態に陥ることで外集団成員に対して深刻な攻撃や差別が行われることがあるためである。破壊的な集団間紛争の心理メカニズムの解明が求められる (縄田, 2013)。本論文では集団間紛争における感情の役割に焦点を当て、集団間感情に関する研究を概観するとともに、その展望を議論していく。

2. 個人としての感情／集団としての感情： 集団間感情理論からのアプローチ

感情を説明する重要理論の一つに認知的評価理論が挙げられる (Frijda, 1986; Roseman, 1984)。これによると、人の感情は、自らに起きた出来事に対する認知的評価の結果生じる。しかし、自分個人には直接の利害関係がなくとも、自分以外の他者に起きた出来事に

Correspondence concerning this article should be sent to: Kengo Nawata, Institute of Decision Science for a Sustainable Society, Kyushu University, Fukuoka, 812-8581, Japan (e-mail: nawatakengo@gmail.com)

対して感情が喚起されることがある。その1つは共感であり、人間の持つ社会性の特徴として重要視され、多くの研究蓄積がある（集団間紛争と共感性の関連性に関しては、中村（2014）に詳しく議論されている）。もう1つは、内集団や内集団成員に起きた出来事に対して、喚起される感情である。これは集団間感情（intergroup emotion, またはgroup-based emotion）と呼ばれ、その心理過程に関する中心的理論の一つが集団間感情理論である（Intergroup Emotions Theory; Smith, 1993; Mackie, Devos, & Smith, 2000）。共感、特に内集団への共感と集団間感情はともに重なりを持つものであるが、本論文では主に後者に関する研究を中心に議論を行っていく。

集団間感情理論は「我々としての感情」から様々な集団間行動を説明しようとする理論である。感情の認知的評価理論と自己カテゴリー化理論（Self-Categorization Theory; Turner, Hogg, Oakes, Reicher, & Wetherell, 1987）を融合した理論だといえる。まず、感情の認知的評価理論によると、上に挙げたように、ある出来事が自分にとってどのような出来事だと評価されるかによって、生起する感情の種類と強さが決まる。また、自己カテゴリー化理論とは、社会的アイデンティティ理論（Social Identity Theory; Tajfel & Turner, 1979）の拡張理論の一つである。自己カテゴリー理論によると、人は自らとその所属している集団

やカテゴリーを同一視する傾向がある。そのため、人は所属している集団やカテゴリーを自己の一部のようなものとして認知するようになる（自己カテゴリー化；self-categorization）。これらの2つの理論をともに考慮すると、自己カテゴリー化によって自らと所属集団が同一視され、自らと同一視された所属集団に起きた出来事に対する認知的評価がなされた結果、集団間感情が生じる。

この集団間感情理論による集団間行動を引き起こす感情過程をまとめたものがFigure 1である。ある出来事が発生したときに、(1) この出来事が「内集団 対 外集団」という対立事象として解釈される（集団間フレーミング）。次に、(2) 内集団にとってどのような出来事が評価がなされる。これは特に内集団同一視が高い人において顕著となる。(3) その評価の結果、怒りや恐怖といった様々な感情が喚起され、(4) それに対応する形で攻撃や回避といった集団間行動がなされる。

この過程の例として、来日外国人犯罪報道への接触という場面で考えてみよう。ある外国人が日本で強盗殺人を行ったという報道を知り、(1) この犯罪を個人間で起きた出来事ではなく、当該国人が日本人を殺した事件として認識し、(2) 日本人への危害事象として評価を行う。このような評価の結果、(3a) 怒りが喚起されれば、(4a) 当該国人全般への攻撃・差別行動

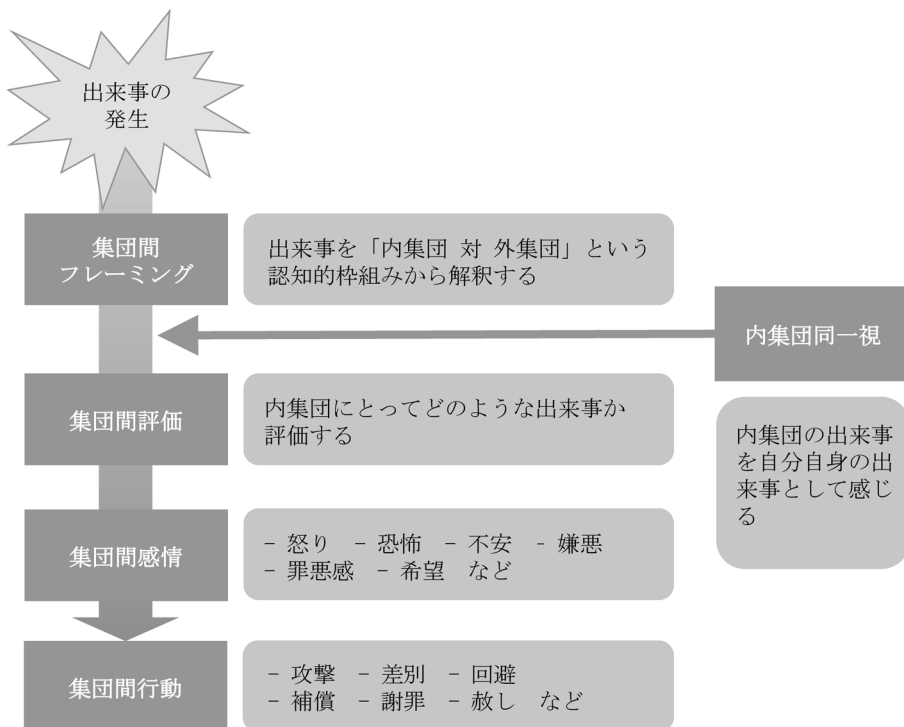


Figure 1. 集団間感情理論における集団間感情過程

が行われ、(3b) 恐怖が喚起されれば、(4b) 当該国人全般との関わりを回避する行動が行われる。

したがって、集団間感情理論によると、集団間フレーミングと内集団同一視が集団間感情とそれに伴う行動を変化させる。集団間フレーミングにより、「内集団 対 外集団」という認知的枠組みで出来事が解釈されることで、その出来事は自分とは無関連の他者に起きた出来事ではなく、自らの所属集団と関連した集団間事象として解釈される。例えば、Ray, Mackie, Rydell, & Smith (2008) では、自らをアメリカ人として認知させたときには、自らを学生として認知させたときに比べて、イスラム教徒に対する怒りが高く、尊敬が低いことが示された。これは、学生として自らを認知しているときに比べて、アメリカ人として自分を認知しているときには、「アメリカ人 対 イスラム教徒」という認知的枠組みが顕現化されるためである。また、Dumont, Yzerbyt, Wigboldus, & Gordijn (2003) では、9・11テロ攻撃に対してアメリカ人が抱く恐怖は、「西洋とアラブの反応を比較する」と教示した場合に、「ヨーロッパとアメリカを比較する」と教示した場合よりも強かった。これも同様に、前者の教示を与えられた場合に「西洋 対 アラブ」という認知的枠組みがより顕現化したためである。

以上をまとめると、“我々”の出来事だと認識することで、それに合わせた認知的評価を行い、集団間感情が強く感じられるようになる。逆に言うと、“他人ごと”ならぬ“他集団ごと”だと認識されれば、集団間感情は喚起されない。

3. 集団間攻撃における感情の役割

集団間紛争状況で、最も破壊的な結果に至るのは、成員により集団間攻撃行動がなされる場合である。このことを考えると、集団間攻撃において、感情の役割を議論することは重要となる。本論文では、特に怒り(anger)と恐怖(fear)の2つを中心に議論する。

怒り まず、怒りは、一般的に攻撃行動を強める(Anderson & Bushman, 2002)。これは集団間関係においても同様に当てはまり、集団間怒りを強く感じている人は、軍事攻撃などの集団間攻撃を支持する傾向がある。例えば、9・11テロ攻撃に対するアメリカ人の中東への軍事攻撃支持(Cheung-Blunden & Blunden, 2008; Lambert, Scherer, Schott, Olson, Andrews, O'Brien, & Zisser, 2010)、日中関係における日本人から中国人への軍事攻撃支持(縄田・山口, 2012)、セルビア、ボスニア、アルバニアでの民族間関係における軍事攻撃支持(Spanovic, Lickel, Denson, & Petrovic, 2010)、アメリカ白人におけるメキシコ移民制限の政策支持(Cottrell, Richards, & Nichols, 2010)などは、集団間怒り感情との正関連が確認されている。このように、怒りは一貫して集団間

攻撃の先行要因となることが指摘されてきた。

ただし、怒りは、憎しみ(hatred)との交互作用も指摘されており、イスラエル-パレスチナ紛争場面において、憎しみが低い場合には、怒りがむしろ和解や歩み寄りといった平和構築行動を促進していた(Halperin, Russell, Dweck, & Gross, 2011)。また、怒りは軍事攻撃の支持とともに、平和に向けた非暴力的なリスクテイク行動を促進するという(Reifen-Tagar, Halperin, & Federico, 2011)。このように、怒りが集団間攻撃に及ぼす影響は、単純で線形関係ではないことも示唆されており、今後より詳細な理解が求められる。

恐怖 恐怖と集団間攻撃の関連性に関する知見は一貫せず、研究ごとに異なっている。恐怖は集団間攻撃と正関連であるという研究もあれば(Dumont et al., 2003; Spanovic et al., 2010, Study 1)、負関連であるという研究(縄田・山口, 2012; Sadler, Lineberger, Correll, & Park, 2005; Spanovic et al., 2010, Study 2)、関連なしという研究(Liberman & Skitka, 2008; Mackie et al., 2000; Skitka, Bauman, Aramovich, & Morgan, 2006)まで、それぞれの研究ごとに異なっているのが現状である。

恐怖と集団間攻撃の関連性はなぜ一貫しないのだろうか。感情と行動の関連として古くより指摘されているのが、怒りは闘争を引き起こし(anger-fight)、恐怖は逃走を引き起こす(fear-flight)(Cannon, 1932)。そのため、恐怖が逃走や回避を促進することに伴い、攻撃は低下することが考えられる。その一方で、恐怖と近い概念である内集団への脅威(threat)の知覚はおおむね外集団への差別や攻撃と正関連である(Riek, Mania, & Gaertner, 2006; Wohl & Branscombe, 2009)。これは脅威が防衛的攻撃を引き起こすためだと考えられる(Leidner, Tropp, & Lickel, 2013)。つまり、理論上は、恐怖は集団間攻撃の促進も抑制も同時に説明しうる。では、どのような場合に恐怖は集団間攻撃を促進/抑制するのだろうか。

Spanovic et al. (2010) では、セルビア-アルバニア関係におけるセルビア人(Study 1)、ならびにセルビア-ボスニア関係におけるボスニア人(Study 2)をそれぞれ対象に、感情と集団間攻撃の検証を行った。その結果、Study 1とStudy 2において、恐怖から集団間攻撃へのパスの正負が逆であった。負関連であったStudy 2に対して、Spanovicらは既に解決した集団間関係であるためだと解釈している。縄田・山口(2012)は、恐怖が集団間攻撃と負関連であった研究を概観し、恐怖を感じる相手に攻撃することでさらなる報復テロや民族間関係の悪化など内集団に大きな損害や不利益が生じる可能性を考慮した場合には、恐怖が攻撃を抑制する可能性を指摘している。また、Iyer, Hornsey, Vanman, Esposito, & Ale (2014) の知見も示

峻に富む。アメリカ人、イギリス人、オーストラリア人を対象に、オサマ・ビン・ラディンからの「アフガニスタン戦争から手を引かないと攻撃を加える」というメッセージに対する反応を検討した。興味深いことに、恐怖感情は自国のアフガニスタン戦争介入支持とは負相関であるにもかかわらず、逆に一般的なアフガニスタン戦争支持とは正相関が見られた。

以上の知見を踏まえると、恐怖感情が集団間攻撃を強めるか弱めるかは、攻撃が内集団にどのような結果をもたらすと評価されるのかによって決まる可能性が考えられる。攻撃すれば恐怖の原因となる脅威が解消すると思えば、集団間攻撃を支持するだろう。逆に、攻撃することによる報復の可能性に恐怖を感じれば、攻撃を支持しないだろう。ただし、これは現在のところ仮説的解釈に過ぎず、今後実証的な検証が求められる。

その他の感情 もちろん怒りや恐怖以外にも集団間紛争において重要となる感情は多く存在する。不安 (anxiety; Stephan & Stephan, 1985), 嫌悪 (disgust; Cottrell & Neuberg, 2005; Hodson & Costello, 2007), 罪悪感 (guilt; Branscombe & Doosje, 2004), シャーデンフロイデ (他者の不幸に対する喜び, schadenfreude; Leach, Spears, Branscombe, & Doosje, 2003), などである。本論文では紙幅の都合で十分に扱えなかったが、これらの感情も考慮した統合的な集団間感情の理解が重要だといえる。

4. 集団間感情アプローチが貢献すること

感情から集団間紛争や集団間関係を説明しようとする集団間感情アプローチには、次のような利点がある。一つが、外集団に対する信念や態度のみならず、その帰結としての行動に着目している点である。感情は行動への準備状態であるため、集団間感情は集団間行動を予測する。単に外集団の印象が悪いだけでは、紛争は生じない。実際に外集団に対して攻撃や差別といった行動がなされて初めて、紛争という社会問題となる。感情は認知よりも、よりよく行動を説明しうることも指摘されている (Stangor et al., 1991; Tropp & Pettigrew, 2005)。その意味で、行動と密接な関連のある集団間感情からのアプローチは有益だといえる。

また、集団間感情アプローチは、「内集団＝ポジティブ、外集団＝ネガティブ」という単純な考え方を超えて、それぞれの外集団への異なる感情反応とそこから導かれる行動を説明できる。Cottrell et al. (2010) は、外集団に対する感情として怒り、嫌悪、恐怖、哀れみの4つを測定し、それぞれの感情が様々な社会集団に対する様々な政策の支持を予測・説明可能であることを指摘した。単なる否定的態度と十把一絡げにまとめるのではなく、怒りなのか嫌悪なのかで生じる行動は異なる。これを直接検討できるのが、集団間感情アプ

ローチの利点である。

理論面としても、集団間感情アプローチの利点は大きい。集団間感情理論は、従来の社会心理学の集団間関係研究で広く用いられている社会的アイディティ理論を感情面に拡張したものである。その意味で、従来の社会心理学における集団間関係研究と整合性の高い一貫した説明を可能としている。また、感情研究においても進化・適応論的なアプローチが近年増加している (北村・大坪, 2012)。集団間感情研究においても同様であり、偏見や差別の際の感情がなぜ人間に根付いているのかを説明するために、感情の進化適応の観点からの研究が行われてきた (例えば, Cottrell & Neuberg, 2005)。このように、感情という要素を加えることで、これまで独自に発展してきた集団間関係研究における理論が統合的に解釈できる可能性が考えられる。

5. 集団間感情から集会的感情へ

筆者はこれまで集団間紛争における集団内力学の影響に関して検討してきた (縄田, 2013)。すなわち、集団間紛争は、同じ集団成員どうしの相互作用の中で激化していくことがあるというアプローチである。その一つとして、例えば、集団内過程として賞賛獲得と拒否回避という集団内評判が、集団間攻撃を強める過程を議論してきた (Nawata & Yamaguchi, 2013)。ただし、このモデルは評判、すなわち集団内他者からの評価が紛争を強めるという側面を議論してきたが、集団内過程としての感情を十分には議論できていない。この節では、集団間紛争における集団内力学の側面として、集団間感情とその集会的共有化・激化過程を議論していく。

これまでの集団間感情の研究は、個人内で完結した影響過程を扱っている研究が大半である。Yzerbyt & Kuppens (2013) は、従来の集団間感情研究の多くは、集団レベルの感情と呼んでいるにも関わらず、孤立した個々人が質問紙に感情反応を回答する形式で研究が行われてきたと指摘している。

しかしながら、感情は個人内にとどまらず、共感により他者に“感染”する (Rimé, 2009)。否定的な集団間感情は、各個人一人が抱くことのみが問題なのではなく、社会集団全体で共有されるからこそ社会問題となる。例えば、9・11テロ後のアメリカにおいて、イスラム教徒に対する敵意が共有され、ひいては罪のないイスラム教徒に対して社会全体で攻撃や排斥がなされることは問題だろう。したがって、社会・集会的な過程としての集団間感情の共有化・激化過程の理解が必要となる。

集団間感情は、内集団に対する評価に基づいて生じるものである。したがって、同じ集団に所属する内集団成員同士は相互に類似した感情を抱くことが考えら

れる。類似した感情を持つ内集団成員同士が相互作用するときには、互いにその感情や認知の正当性を確認しあうことによって、敵対感情が集団内で共有化・激化していくことが考えられる。これは、個人現象としての集団間感情を、社会や集団全体で共有された集会的現象として解釈したという点で、集会的感情 (collective emotion) と呼ぶことができるだろう。

このような視点から考えると、集団内コミュニケーションによる集団間敵対感情の相互強化過程が存在すると考えられる。例として、来日外国人犯罪に関して、日本人同士で話しあう中で、犯人の出身国民全体に対する敵意が共有化され、さらには激化していく場面が挙げられる。もちろん場面ごとに、怒り、恐怖、不安など様々な感情が共有化・激化していくことが考えられる。

従来の研究では、感情ではなく、主に外集団に対する態度やステレオタイプといった認知的側面に関する集団内会話の効果が検討されてきた。例えば、Janis (1982) は、集団内の話し合いによって誤った集団意思決定が行われた事例を挙げ、それを集団浅慮 (groupthink) と呼んだ。集団浅慮の症状の一つとして、敵集団をステレオタイプ化することを指摘した。また、Smith & Postmes (2011) は、話し合いの中で外集団のステレオタイプが規範として知覚されるようになり、差別行動が増加することを示した。さらに、縄田 (2014) では、上記のモデルを基に、中国・ロシアとの領土問題を3人の日本人学生が討議することで、否定的感情や態度が共有化されるかを実験的に検討した。しかし、怒りや恐怖といった感情評定に関しては級内相関が非有意であり、この実験では集団内での感情共有は確認されなかった。その一方で、中国やロシアへの好意的態度は共有されていた。集団レベルの効果を検討したところ、領土問題以外の集団間対立の話題を取り上げていた集団ほど、集団内討議により好意的態度を悪化させていた。このことは、否定的態度の集団内相互強化過程の存在を示唆するものである。しかし、感情的側面は未だ十分に扱えていないため、今後はこのモデルに示したような感情的側面をより適切に扱った実証研究が求められる。

6. 感情制御による集団間紛争解決

ここまで見てきたように、集団間紛争では感情が大きな役割を担う。だからこそ、感情制御 (emotional regulation) を行うことで、紛争の解決が期待できる。感情制御とは、自らの感情の経験や表出をコントロールすることである。つまり、集団間紛争における感情制御とは、紛争状態に伴う否定的・破壊的な感情の反応を適切にコントロールすることで、紛争解決を行うと試みである。従来の社会心理学分野における集団間紛争解決を目指した介入研究は、信念や態度に焦点が当てられ、感情反応は副産物だと見なしてきた。しかし、感情制御の観点からは、むしろ感情反応こそが集団間紛争において中心的な役割を担うものだと考えられるため、感情反応への適切な介入が重要となる (Halperin, Cohen-Chen, & Goldenberg, 2014)。

Gross, Halperin, & Porat (2013) は集団間紛争における政治的態度と集団間行動を生起させる感情制御過程として、特に認知的再評価の重要性を指摘した (Figure 2)。認知的再評価とは、状況の意味付けを肯定的なものに変化させ、そこからの感情的反応も肯定的に変化させることである。Figure 1の集団間感情理論に基づく心理過程で示したように、認知的枠組みは極めて重要な役割を担う。紛争を解釈する際の認知的枠組みが異なれば、例え同じ紛争出来事に対しても異なる認知的評価が生じるといえる。

近年の実証研究により、現実の集団間紛争の解決を目指した介入として、感情制御の有効性が示されている。感情制御には、直接的なものと間接的なものの2種類が指摘されている (Halperin et al., 2014)。1つめの直接的感情制御とは、集団間紛争解決を目指して、直接的に状況の意味付けに変化を加えることにより、否定的感情を減らし、肯定的で建設的な感情へと感情反応を変化させようとする方略である。Halperin, Pliskin, Saguy, Liberman, & Gross (2014) によると、客観的・中立的な視点から認知的再評価を行うよう実験的に教示することで、イスラエルの学生において外集団への否定的感情が低下した。また、Halperin, Porat, Tamir, & Gross (2013) では、怒りを喚起する、

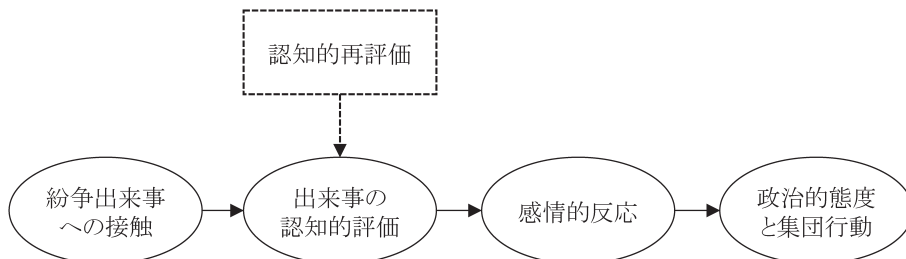


Figure 2. 集団間紛争解決を導く感情制御過程

Note. Gross, Halperin, & Porat (2013) Figure 1より引用。

紛争場面とは別の絵画に対する認知的再評価の訓練を行った場合に、統制条件と比較して、介入から5ヵ月後のパレスチナへの怒り感情が低くなっていた。このように、紛争を解釈する認知的枠組みを直接変化させるような介入を行うことで、外集団に対する否定的感情反応が低減される。

2つめの手法が間接的感情制御である。そもそも紛争状況で怒りや敵意を感じている成員は感情を制御する動機づけを持たないことが多い。したがって、直接的に感情を制御させるような介入方法はときに被介入者に拒絶されることもあるかもしれない。そこで、間接的な手法が重要となる。例えば、集団というものは変わりうるものだ（可変性、malleability）という内容の科学記事を読ませると、イスラエル-パレスチナ紛争における集団間の憎しみが低下することや（Halperin, Russell, Trzesniewski, Gross, & Dweck, 2011）、希望が増加し、平和への譲歩が支持されるようになること（Cohen-Chen, Halperin, Crisp, & Gross, 2014）が示されている。集団間紛争は、今後良い変化は期待できないという信念により維持されている。そのため、集団の可変性に対する信念への介入は、間接的に否定的感情反応を低減する効果を持っていたといえる。

このように、感情は認知的評価やフレーミングにより規定されるからこそ、そこに適切な介入を加えることで、外集団への感情を変化させ、ひいては集団間紛争の解決の糸口となることが期待できる。

7. 最後に

民族紛争が自国内で起き、民間人が軍事攻撃に巻き込まれているような国に比べると、日本は紛争の現場ではない。また、人種間・民族間の対立は欧米ほど表面化していない。しかし、だからといって日本人にとって集団間紛争は対岸の火事であるわけではない。例えば、日中・日韓関係における両国民の態度は悪化の一途をたどっており、特定の国籍や人種の人々へのヘイトスピーチも問題視されている。社会学や国際関係論からのみならず、その心理的側面からの理解や示唆が求められる。本研究で議論したような感情からの集団間紛争へのアプローチは、今後の日本においてますます重要となるだろう。

引用文献

- Anderson, C. A., & Bushman, B. J. (2002). Human aggression. *Annual Review of Psychology*, **53**, 27-51.
- Branscombe, N. R., & Doosje, B. (Eds.) (2004). *Collective guilt: International perspectives*. Cambridge University Press.
- Cannon, W. B. (1932). *The wisdom of the body*. New York, US: W. W. Norton & Co.
- Cheung-Blunden, V., & Blunden, B. (2008). The emotional construal of war: Anger, fear, and other negative emotions. *Peace and Conflict: Journal of Peace Psychology*, **14**, 123-150.
- Cohen-Chen, S., Halperin, E., Crisp, R. J., & Gross, J. J. (2014). Hope in the middle east malleability beliefs, hope, and the willingness to compromise for peace. *Social Psychological and Personality Science*, **5**, 67-75.
- Cottrell, C. A., & Neuberg, S. L. (2005). Different emotional reactions to different groups: a sociofunctional threat-based approach to "prejudice". *Journal of Personality and Social Psychology*, **88**, 770-789.
- Cottrell, C. A., Richards, D. A., & Nichols, A. L. (2010). Predicting policy attitudes from general prejudice versus specific intergroup emotions. *Journal of Experimental Social Psychology*, **46**, 247-254.
- Dumont, M., Yzerbyt, V., Wigboldus, D., & Gordijn, E. H. (2003). Social categorization and fear reactions to the September 11th terrorist attacks. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1509-1520.
- Frijda, N. H. (1986). *The emotions*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Gross, J. J., Halperin, E., & Porat, R. (2013). Emotion regulation in intractable conflicts. *Current Directions in Psychological Science*, **22**, 423-429.
- Halperin, E., Cohen-Chen, S., & Goldenberg, A. (2014). Indirect emotion regulation in intractable conflicts: A new approach to conflict resolution. *European Review of Social Psychology*, **25**, 1-31.
- Halperin, E., Pliskin, R., Saguy, T., Liberman, V., & Gross, J. J. (2014). Emotion regulation and the cultivation of political tolerance: Searching for a new track for intervention. *Journal of Conflict Resolution*, **58**, 1110-1138.
- Halperin, E., Porat, R., Tamir, M., & Gross, E. (2013). Can emotion regulation change political attitudes in intractable conflict? From the laboratory to the field. *Psychological Science*, **24**, 106-111.
- Halperin, E., Russell, A. G., Dweck, C. S., & Gross, J. J. (2011). Anger, hatred, and the quest for peace: Anger can be constructive in the absence of hatred. *Journal of Conflict Resolution*, **55**, 274-291.
- Halperin, E., Russell, A. G., Trzesniewski, K. H., Gross, J. J., & Dweck, C. S. (2011). Promoting the Middle East peace process by changing beliefs about group malleability. *Science*, **333**, 1767-1769.
- Hodson, G., & Costello, K. (2007). Interpersonal disgust, ideological orientations, and dehumanization as predictors of intergroup attitudes. *Psychological Science*, **18**, 691-698.
- Iyer, A., Hornsey, M. J., Vanman, E. J., Esposito, S.,

- & Ale, S. (2014). Fight and flight: Evidence of aggressive capitulation in the face of fear messages from terrorists. *Political Psychology*, Advanced online publication doi: 0.1111/pops.12182
- Janis, I. L. (1982). *Groupthink: Psychological studies of policy decisions and fiascoes*. Boston: Houghton Mifflin.
- 北村英哉・大坪庸介 (2012). 進化と感情から解き明かす社会心理学 有斐閣
- Lambert, A. J., Scherer, L. D., Schott, J. P., Olson, K. R., Andrews, R. K., O'Brien, T. C., & Zisser, A. R. (2010). Rally effects, threat, and attitude change: an integrative approach to understanding the role of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **98**, 886-903.
- Leach, C. W., Spears, R., Branscombe, N. R., & Doosje, B. (2003). Malicious pleasure: Schadenfreude at the suffering of another group. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 932-943.
- Leidner, B., Tropp, L. R., & Lickel, B. (2013). Bringing science to bear—on peace, not war: Elaborating on psychology's potential to promote peace. *American Psychologist*, **68**, 514-526.
- Liberman, P. & Skitka, L. J. (2008). Just Deserts in Iraq: American Vengeance for 9/11. Saltzman Working Paper No. 9.
- Mackie, D. M., Devos, T., & Smith, E. R. (2000). Intergroup emotions: Explaining offensive action tendencies in an intergroup context. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 602-616.
- Mackie, D. M., Smith, E. R., & Ray, D. G. (2008). Intergroup emotions and intergroup relations. *Social and Personality Psychology Compass*, **2**, 1866-1880.
- 中村 真 (2014). 共感と向社会的行動——集団間紛争の問題を通して考える—— 梅田 聡 (編) 岩波講座 コミュニケーションの認知科学2 共感 岩波書店. pp. 139-165.
- 縄田健悟 (2013). 集団間紛争の発生と激化に関する社会心理学的研究の概観と展望 実験社会心理学研究, **53**, 52-74.
- 縄田健悟 (2014). 国家間対立事象の討議における否定的態度の集団内相互強化過程——領土問題討議による実験的検討—— 九州心理学会第75回大会
- 縄田健悟・山口裕幸 (2012). 集団間攻撃における集合的被害感の役割——日中関係における検討—— 心理学研究, **83**, 489-495.
- Nawata, K., & Yamaguchi, H. (2013). Intergroup retaliation and intra-group praise gain: The effect of expected cooperation from the in-group on intergroup vicarious retribution. *Asian Journal of Social Psychology*, **16**, 279-285.
- Ray, D. G., Mackie, D. M., Rydell, R. J., & Smith, E. R. (2008). Changing categorization of self can change emotions about outgroups. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 1210-1213.
- Reifen-Tagar, M., Halperin, E., & Federico, C. M. (2011). The positive effect of negative emotions in protracted conflict: The case of anger. *Journal of Experimental Social Psychology*, **47**, 157-163.
- Riek, B. M., Mania, E. W., & Gaertner, S. L. (2006). Intergroup threat and outgroup attitudes: A meta-analytic review. *Personality and Social Psychology Review*, **10**, 336-353.
- Rimé, B. (2009). Emotion elicits the social sharing of emotion: Theory and empirical review. *Emotion Review*, **1**, 60-85.
- Roseman, I. J. (1984). Cognitive determinants of emotions: A structural theory. In P. Shaver (Ed.), *Review of personality and social psychology: Vol. 5. Emotions, relationships, and health*. Beverly Hills, CA: Sage. pp. 11-36.
- Sadler, M. S., Lineberger, M., Correll, J., & Park, B. (2005). Emotions, attributions, and policy endorsement in response to the September 11th terrorist attacks. *Basic and Applied Social Psychology*, **27**, 249-258.
- Skitka, L. J., Bauman, C. W., Aramovich, N. P., & Morgan, G. S. (2006). Confrontational and preventative policy responses to terrorism: Anger wants a fight and fear wants “them” to go away. *Basic and Applied Social Psychology*, **28**, 375-384.
- Smith, E. R. (1993). Social identity and social emotions: Toward new conceptualizations of prejudice. In D. M. Mackie & D. L. Hamilton. (Eds.), *Affect, cognition, and stereotyping: Interactive processes in group perception*. San Diego, CA: Academic Press. pp. 297-315.
- Smith, L. G., & Postmes, T. (2011). The power of talk: Developing discriminatory group norms through discussion. *British Journal of Social Psychology*, **50**, 193-215.
- Spanovic, M., Lickel, B., Denson, T. F., & Petrovic, N. (2010). Fear and anger as predictors of motivation for intergroup aggression: Evidence from Serbia and Republika Srpska. *Group Processes & Intergroup Relations*, **13**, 725-739.
- Stangor, C., Sullivan, L. A., & Ford, T. E. (1991). Affective and cognitive determinants of prejudice. *Social Cognition*, **9**, 359-380.
- Stephan, W. G., & Stephan, C. W. (1985). Intergroup anxiety. *Journal of Social Issues*, **41**, 157-175.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An Integrative Theory of Intergroup Conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations*. Monterey, CA: Brooks-Cole.
- Tropp, L. R., & Pettigrew, T. F. (2005). Differential relationships between intergroup contact and affective and cognitive dimensions of prejudice. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 1145-1158.
- Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S.

- D., & Wetherell, M. S. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford and New York: Blackwell.
- Wohl, M. J. A., & Branscombe, N. R. (2009). Group threat, collective angst and ingroup forgiveness for the war in Iraq. *Political Psychology*, **30**, 193-217.
- Yzerbyt, V. Y., & Kuppens, T. (2013). From group-based appraisals to group-based emotions: The role of communication and social sharing. In D. Hermans, B. Rimé, & B. Mesquita (Eds.), *Changing emotions*. New York: Psychology Press. pp. 97-104.